ノーベル平和賞 県内被爆者喜び

今後の活動内容などについて話し合う県原爆被爆者の会のメンバーら（2020年8月）

「涙出るほどうれしい」「核兵器廃絶の実現を」

「長年の活動が報われた」「涙が出るほどうれしい」。日本原水爆被害者団体協議会（被団協）がノーベル平和賞を受賞した11日、県内の被爆者や関係者からも喜びの声が上がった。ただ、世界の現状は核兵器廃絶の実現には程遠いだけに「次の世代こそ核廃絶を実現してほしい」という切実な願いも聞かれた。

被団協に加盟する県内の被爆者団体「高知県原爆被爆者の会」は終戦から15年後の1960年ごろに発足した。被爆体験の継承を活動の柱の一つに据え、各地の学校に語り部を派遣。手記を出版するなど、戦争の悲惨さや核兵器廃絶を訴えてきた。

一昨年まで会長を務めた渡辺房夫さん(93)＝南国市＝は広島県出身で、被爆時は14歳だった。爆心地から約30キロ北の学徒動員先にいて無事だったが、国鉄で働く兄を捜すため4日後に広島市内へ向かい、「入市被爆」した。

渡辺さんは仕事の都合で76年から高知で暮らしており、2013年に会長に就いた。受賞の知らせに「当初から活動してきた人の苦労が報われた」と喜びをかみしめながら、「自分たちの世代では核廃絶には至らなかった。次の世代に託したい」と穏やかに語った。

原爆投下から79年。被爆者の高齢化が進む。県によると戦後、県内に600人近くいた被爆者は今年3月末時点で69人になり、平均年齢は87歳を超えた。

県被爆者の会もピークの1975年には400人ほどの会員がいたが、現在は約40人。活動は四国他県の団体との交流や、年1回の会報発行にとどまる。3歳の時に広島で被爆した事務局長の宅間明亜（あきえ）さん(82)＝高知市＝は「もう来年になったらやめろうか、いや、もう1年は頑張ろう、と毎年思いながら活動しゆう」と話す。

今後の活動は被爆者の2世、3世が中心となる。2022年に会長を継いだ桜木敏幸さん(75)＝同＝は、母の喜代子さん（1992年死去）が広島で被爆した2世だ。

桜木さんは「当事者の活動は難しくなるが、県内には54年の米国によるビキニ環礁の水爆実験で被ばくした元船員もいる。連携して核廃絶に向けた運動を続けたい」と意気込む。

伯父が広島で被爆し、長く県内の被爆者支援に取り組んできた平和資料館「草の家」（高知市升形）の副館長、岡村啓佐（けいすけ）さん(73)は「涙が出るほどうれしい！」と受賞を喜ぶ一方で、世界の現状に警鐘を鳴らす。

2021年に発効した「核兵器禁止条約」に核保有国や、唯一の被爆国である日本が批准していないことを批判し、「政府は受賞の意味を受け止めるべきだ。国内で核廃絶や条約批准に向けた世論が高まることを期待したい」と語った。

（浜崎達朗）